



Data

監督・脚本・プロデューサー: アク・ロウヒミエス

原作: ヴァイニョ・リンナ『無名戦士』

出演: エーロ・アホ/ヨハンネス・ホロバイネン/ジュシ・ヴァタネン/アク・ヒルヴィニエミ/ハンネス・スオミ/パウロ・ヴェサラ/アンドレイ・アレノ/アルトゥ・カプライン/サムエル・パウラモ

👁️👁️ みどころ

『ヒトラーの忘れもの』(15年)や『ヒトラーに屈しなかった国王』(16年)では、デンマークやノルウェーがナチスドイツといかに対峙したかを学んだが、本作ではフィンランド vs ソ連の「冬戦争」と「継続戦争」のお勉強を、ナチスドイツと絡めてしっかりと！

スターリングラードの戦いやダンケルクの戦い、そしてノルマンディの戦いはよく知っているが、「冬戦争」とは？「継続戦争」とは？また、1939年9月のポーランド侵攻の翌年4月には、デンマークとノルウェーを占領したナチスドイツがフィンランドを占領せず、逆に1941年1月にはフィンランド地域に関わる「銀狐」作戦を展開したのは一体なぜ？

知らなかったなあ、あれもこれも！そして本作も！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 70歳ではじめてフィンランドの冬戦争と継続戦争を！ ■□■

私は自分をそれなりの歴史通だと自負している。とりわけ、戦争の歴史についてはよく勉強しているつもりだったが、フィンランドの冬戦争と継続戦争については本作を観るまで全く知らなかった。ナチスドイツが1939年9月にポーランドに侵攻したことによって第二次世界大戦が始まった。そして、ナチスドイツは1940年4月にデンマークとノルウェーを占領した後、「西方戦役」を開始し、6月にはフランスを降伏させたが、フィンランドは占領していない。それは一体なぜ？それは、1939年11月にソ連とフィンランドとの間で「冬戦争」が勃発し、翌1940年3月に冬戦争がソ連の勝利で終わったものの、それに続く「継続戦争」でフィンランドがソ連に反撃するについて、ナチスドイツ

の力を借りたためだ。そして、1940年9月には領内通過協定に基づき、ドイツ軍第1陣がフィンランドに到着し、さらに1941年1月にはドイツ、フィンランド地域に関わる「銀狐」作戦を策定している。そして、遂に1941年6月にドイツ軍がソ連に侵攻するとともに、フィンランド軍も旧国境を越えて東カレリアに侵攻したわけだ。

つまり、フィンランドはナチスドイツの同盟国としてソ連と戦争したわけではないが、フィンランドの領土でありながら冬戦争でソ連に奪われたラドガカレリアの奪還をはじめとするソ連への反攻作戦＝継続戦争は、ソ連への侵攻を目指すナチスドイツの協力の下で遂行されたわけだ。したがって、ナチスドイツの力が西方にも東方にも強力に及んだ時はフィンランドもソ連への侵攻を強め、東カレリアを故郷とする本作の主人公ロッカ（エーロ・アホ）たちの東カレリアへの侵攻も成功したが、ナチスドイツの力が弱まり、フィンランドへの援助が弱まってくると・・・。

本作のパンフレットには、「フィンランド戦争年表」があり、斎木伸生氏（軍事評論家）の「継続戦争と第二次世界大戦中のフィンランドとドイツ、日本との関係」、秋本鉄次氏（映画評論家）の「無名兵士の視線がヒシヒシと伝わる“知られざる戦争”のリアル！」があるので、本作を契機にこれらを読んで、「冬戦争」と「継続戦争」をしっかりと勉強したい。

■ロッカの主人公は？『人間の条件』の梶らと比較すると？■

本作の主人公である一機関銃中隊に配属されたロッカは家族と農業を営んでいたが、屈辱の戦争となった「冬戦争」で多くの経験を積んだため、「継続戦争」の時点では熟練兵になっていた。本作はフィンランドでは知らない人はいないというヴァイニョ・リンナの古典小説「無名戦士」を原作としたもので、原作者自身の経験から第8歩兵連隊がそのモデルと言われている。もっとも、ロッカは冬戦争でソ連に奪われた自分の畑を取り戻し耕したいため、継続戦争に参加し奮闘しているだけで、それ以上には戦争の価値を認めていなかった。

ロッカの直接の上司は小隊長のコスケラ（ジュシ・ヴァタネン）だが、中隊長にはランミオがいた。また、同じ中隊には、婚約者をヘルシンキに残して最前線で戦い、ヘルシンキで式を挙げてすぐに戦場へとんぼ返りするカリルオト（ヨハンネス・ホロパイネン）率いる小隊もあったから、ロッカとそれらの上官との関係は如何に？また、ロッカは戦場でも気心の知れた仲のスシ（アルトゥ・カブライネン）や、戦場でも純粹な心を失わないヒエタネン（アク・ヒルヴィニエミ）らの同僚と共に奮闘して旧国境を突破し故郷を奪い返したが、その奮闘はいつまで続くの？

日本の戦争文学では、大岡昇平の「野火」や五味川純平の大作「人間の条件」等が有名で、いずれも映画化されている。全6部作となった9時間31分的小林正樹監督の『人間の条件』（59～61年）では、仲代達矢扮する主人公・梶の人間性が大きなポイントになっていた。それと同じように、本作では兵士ロッカの継続戦争における熟練ぶりにも注目だ

が、それ以上の注目点はロッカの人間性。『兵隊やくざ』(65年)における勝新太郎扮する大宮貴三郎は上官に反抗ばかりして鉄拳制裁をくらっていたが、ロッカと上官との関係は？その反抗ぶりは？そして、そこに見るロッカの人間性は？それを「野火」の田村や「人間の条件」の梶、さらに『兵隊やくざ』の大宮と対比させながら、しっかり考えたい。

■□■これが戦争！！そのリアルさを現場から！■□■

『野火』は戦場がクソ暑いフィリピンだったから、敗色濃い田村たち日本軍は、密林の中を逃げ回りながら細々と生きていたが、本作をみると、フィンランドの継続戦争でも、ロッカたちがソ連と戦った戦場は針葉樹林の中が多いことがよくわかる。そのため、敵の銃弾から身を隠す場所はたくさんあるが、同時に敵の位置を探り当てるのは大変だから、現場での戦闘は相当な神経戦になってしまう。もっとも、一方的に攻勢をかけて、旧フィンランド領だった東カレリアへの侵攻を続けている時は、地理カンもあるから比較的戦闘は楽。しかし、ドイツからの援助が途切れて戦線が膠着状態となり、陣地戦になってしまうと大変だ。第1次世界大戦の西部戦線における陣地戦(=塹壕戦)の悲惨さについては、『西部戦線異状なし』(30年)等で有名だが、さて、フィンランドVSソ連の継続戦争における陣地戦の展開は？本作では、そのリアルさをロッカらが見せる戦いの現場からしっかり確認したい。

本作後半からは、ナチスドイツがスターリングラードの戦いでソ連に敗れたことを受けて始まったソ連軍のカレリア攻勢の中で、ソ連軍の戦車が登場してくるから、それに注目！『人間の条件』(59~61年)(『シネマ8』313頁)でも、『戦争と人間』三部作(70~73年)(『シネマ2』14頁)(『シネマ5』173頁)でも、「ノモンハン事件」におけるソ連軍VS関東軍の戦いでは、たこつぼの中から対戦車爆弾を持って戦車の前に肉弾攻勢をかける日本兵の姿が描かれていたが、ロッカらはソ連の戦車に対してどんな戦いを？本作のイントロダクションには、「1テイクに使用した爆薬の量がギネス世界記録に認定されたことで、そのスケールの大きさを感じることができる」と書かれているから、その実感の中で、ロッカたちの戦争のリアルさを感じとりたい。

■□■撤退戦は難しい！頑迷な大隊長の姿に啞然！■□■

戦争においては、攻めるのは容易だが退くのは難しい。日本でも撤退戦の最後尾でしんがり戦を務めるのは最も難しいものとされている。それを見事に処理したのが、織田信長VS浅井・朝倉連合軍が戦った姉川の戦いにおける豊臣秀吉だ。「フィンランド戦争年表」によれば、フィンランド軍が攻勢を止め、陣地戦に入ったのが1941年12月。ソ連軍のカレリア攻勢が始まったのが1944年6月だ。本作では、ロッカはその間に華々しい戦功をあげたことによって休暇をもらって家族の元へ帰る余裕を示していたが、ソ連軍の反抗が始まると、ロッカはもちろん、フィンランド軍全体が大変。しかして、本作終盤の

撤退戦では、兵士たちの戦場からの撤退を認めず「徹底抗戦!」「退却するものは射殺する」という頑迷な大隊長の姿が登場するので、それに注目!

もちろん、フィンランドの軍隊も日本の軍隊と同じ軍隊だから、上下の組織関係があるし、上官の命令への服従は大前提のはず。しかし、ロッカたちの言動をみていると、そこにはかなりの自由度(?)があるようだ。組織の長の優劣が真にわかるのは、優勢のときではなく、自分が不利な状況になった時。本作導入部では、ロッカと対立していたカリラオト小隊長(ヨハネス・ホロパイネン)の勇敢さや、中隊を最後まで指揮するコスケラ小隊長(ジュシ・ヴァタネン)の勇敢さは、終盤のシークエンスでハッキリ見ることができるだけに、大隊長が見せるあまりの無能さは残念。こんな奴の指揮の下で犬死することだけはご免だ。ロッカのみならず、全兵士がそう実感したはずだが……。

■□■知らなかったなあ、あれも、これも!そして本作も!■□■

日本ではスウェーデン、ノルウェー、デンマークの3つの国のことを「北歐三国」とか「スカンジナビア諸国」と呼んでいる。この3つの国は福祉と民主主義が進んだ住みやすい国として有名。それができるのは人口が少ないことが1つの要因だが、そこで高負担、高福祉がうまく機能しているのは一体なぜ?私は常々そんな興味と問題意識を持っていた。そこで、今回フィンランドのことを調べてみると、「スカンジナビア諸国」と呼ばれるスウェーデン、ノルウェー、デンマークの3つの国は、国旗も言葉も通貨も良く似ているうえ、食べているものや人々の性格もよく似ているらしい。しかし、フィンランドはスカンジナビア諸国に地理的にも歴史的にも近いけれども、ちょっと別枠な感じでとらえられているらしい。なるほど、なるほど。それはともかく、「フィンランド戦争年表」には、第2次世界大戦で、1940年4月には早くも北歐三国のうちデンマークとノルウェーが占領されたと書かれている。

私は『ヒトラーの忘れもの』(15年)で、デンマークはナチスドイツに抵抗できなかったためドイツと戦わず、独立国としての体裁を保ちながらドイツの軍事的保護下に置かれ、ドイツもプロパガンダのためにデンマークを「モデル保護国」として扱ったにもかかわらず、ドイツ敗戦後は、戦争の当事者国でないデンマークがドイツの兵隊を捕虜としたうえ、地雷除去作業に強制的に従事させていたことの問題点と、その中でのギリギリの人間性のあり方を学ぶことができた(『シネマ 39』88頁)。また、『ヒトラーに屈しなかった国王』(16年)では、その意外に平凡な内容に少し失望したものの、北歐の小国ながらナチスドイツに最も抵抗し続け、ノルウェーにとって歴史に残る重大な決断を下した国王ホーコン7世の責任者としての苦悩をしっかり学ぶことができた(『シネマ 41』未掲載)。

さらに「ノルマンディ上陸作戦」は、古くは『史上最大の作戦』(52年)でよく知っていたし、「ダンケルクの撤退戦」も、近時の『ダンケルク』(17年)(『シネマ 40』166頁)や『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』(17年)(『シネマ 41』26

頁) 等で再認識していた。しかし、デンマークにおけるドイツ兵の地雷処理への強制従事や、ノルウェーにおけるホーコン7世の決断は私が全く知らなかった歴史上の事実で、それは前述の映画から学んだものだ。それと同じように、本作からはフィンランドの「冬戦争」と「継続戦争」を学ぶことができたことに感謝！

2019 (令和元) 年8月22記